

## 石巻市立鹿妻小学校における災害復興教育の実践 —『復興マップづくり』プログラム—\*

○徳山英理子(東北大学), 桜井愛子(神戸大学), 村山良之(山形大学), 佐藤健(東北大学)

### 1. はじめに

「復興マップづくり」プログラムは、東日本大震災以前から筆者等が開発と実践に取り組んでいた事前予防型の防災教育実践プログラム<sup>1),2)</sup>をアレンジした災害復興教育プログラムである。佐藤ら<sup>3)</sup>によつて報告された平成24年度の石巻市立鹿妻小学校での実践について、本報ではその成果と課題、および25年度の取り組みについて報告する。

### 2. 石巻市立鹿妻小学校の概要

石巻市立鹿妻小学校は、石巻市中心部の東方約4km、海岸線から約1kmの沖積低地上に位置する。周辺地域は、もともと複数列の浜堤上に集落と畠、堤間低地は水田であったが、1970年代以降急激に都市化して、1986年同校が開校した。学区内のほとんどは標高2m程度で、北側の丘陵地の裾でようやく標高5mに達する。学区は津波によって全面的に浸水し、鹿妻小で床上10cm程度浸水した。学区の南部(海側、海岸から約300~500m)では家屋の流出もあり、現在も更地は少なくないが、北側(内陸側)ほど被害が小さい傾向がみられる。

### 3. 「復興マップづくり」プログラムの概要

鹿妻小学校での「復興マップづくり」は、以下の目的で行われている。

①児童一人ひとりが被災の経験と向き合い、地震と津波から立ち直りつつある鹿妻の今の様子をまち歩きにより確認し、復興プロセスに主体的に関わるきっかけをつくること。

②鹿妻の復興の記録を「マップ」として残し、これからも続く鹿妻の復興活動や、広く日本や世界の人々の今後の防災活動に役立たせること。

平成24年度のプログラムは、鹿妻小学校の4年生の総合的な学習の時間を約20時間費やして行われた。プログラムの実践では、津波被災の経験を受けた児童が心的なストレスを受けないように、また自らの地域を肯定的に捉えられる取組みになるよう、工夫と配慮を行い、教育臨床心理学の専門家から助言を得た。学区を12のエリアに分割し、4年生2クラスの全児童が12グループに分かれて活動に取り組んだ。プログラムは、ガイダンス→まち歩き→マップ作成→成果発表で構成された。まち歩き

表1 復興情報の分類

- |  |
|--|
| (ア) 震災の前にはなかったもので震災の後に新しくできたもの(青)              |
| (イ) 震災の前からあったもので被害を受けたがこれまでに直されたもの(緑)          |
| (ウ) いま建設中、修理中のもの(黄)                            |
| (エ) 復興準備中のところ(がれきがなくなつて整理された更地は復興のスタート)(オレンジ)  |
| (オ) 危険や不安に思う場所やもの(赤)                           |
| (カ) その他、みんなが特に気付いた場所やもの(楽しい、きれい、自慢できる場所やもの)(金) |

\*Implementation of "Reconstruction Map Making Program" at Kazuma elementary school in Ishinomaki-City by Eriko Tokuyama,Aiko Sakurai,Yoshiyuki Murayama and Takeshi Sato

で得られた情報は表1に示される(ア)から(カ)の6つの分類で整理され、マップ上に色分けされたシールで示された(図1).分類の(ア)から(オ)は復興の段階の記録、(カ)は子どもの視点で地域の良い所を記録している。

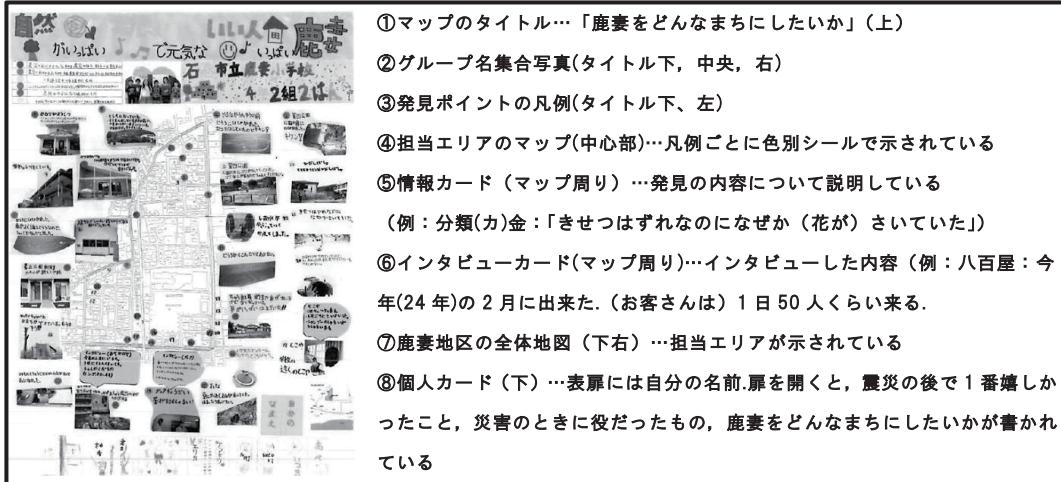


図1「復興マップ」の一例

#### 4. 平成24年度の成果と課題

24年度の最大の成果は、大学研究者、学校、NPO、教育委員会との協働により、「復興マップづくり」という被災地における災害復興教育プログラムが形づくられたこと、また鹿妻小学校で25年度も継続して実施することに発展したことである。成果発表を聞いた保護者からも「震災の経験を前向きにとらえ、地域の未来に役立ってほしい」など一定の評価を受けた。さらに作成された「復興マップ」は石巻市の津波避難ビルや学区内の公園に掲示され、地域住民の目に触れる機会に恵まれた。その一方でプログラムの普及、教育的効果の検証や、今後継続してプログラムを実施することを考えた時の復興マップやその情報の蓄積方法や活用方法の検討が必要である。

#### 5. 平成25年度の取り組み

25年度の取り組みは、他地域への普及可能な学習指導案の作成、鹿妻小学校における総合的な学習の時間での本格展開という二方向での活動が行われている。

##### 5.1 学習指導案の作成

児童の発達段階や、教科・単元の目標を考慮した構成にすることで、単発のイベントプログラムから持続可能な教育プログラムへと転換させること、さらに学習指導案を共有することにより、「復興マップづくり」プログラムの他地域への普及を目的に指導案の開

表2 平成25年度年間学習計画

時期	活動内容	授業時間
1学期	ガイダンス まち歩き(2回) 情報整理	15時間
夏休み	宿題「おうちの人へのインタビュー」	
2学期	復興マップ作成 発表の準備 学年発表会 地域発表会の準備・発表	25時間
3学期	3年生への発表会 5年生への発表・パネルディスカッション 学習の振り返り	10時間

発を行った<sup>4)</sup>.学習指導計画では、全体で 12 時間から 17 時間で実施できる計画とし、まち歩きを行う回数や発表会の回数によって時間数の調整が可能である。

### 5.2 「復興マップづくり」プログラム

25 年度の復興マップづくりは、4 年生の総合的な学習の時間のメインテーマとして表 2 に示す通り、年間約 50 時間の計画で実施している。

プログラムの内容は、24 年度の活動をベースにしながら、特に次に示すような4つの変更を加えている。まず最初に 2 年目の取り組みであるため、昨年度の取り組みを活かし、昨年度の情報との比較することで地域の変化を確認出来るように、まち歩きで使用する地図に昨年度の 4 年生が撮影した写真を加えた。図 2 に実際に児童が記録した内容と撮影した地域の写真を示す。

	平成 24 年度	平成 25 年度
地点 A	 建設中の家「なおしてある」	 家が完成し、人が住んでいる
地点 B	 危険!! 鹿妻第二公園のフェンス 直ってほしい	 きれいに直されている

図 2 地域の変化の一例

次に、地域とのつながりを重視し、事前にまち歩きの際のインタビューを設定したことが挙げられる。復興マップ作成後には、このプログラムの実施にあたりご協力いただいた地域の人や保護者、学生ボランティアを小学校に招き、児童が作成した復興マップについての発表会を行った。地域の人や、保護者からは「住んでいるまちを良く知ることや、仲間で一つのことをやり遂げる経験はすばらしい」、「子ども達のこの経験が無駄にならないように大人がもっと復興に前向きに真剣に取り組まないと改めて思った」といった前向きな感想が得られた。

また、まち歩きでの児童の見守りには、保護者に加えて、東北大学、山形大学、宮城教育大学、東北福祉大学の学生ボランティアの協力を得た。これは、震災の被害を受けて、学区外の仮設住宅に住んでいるなど、学校行事に参加することが困難な環境にある保護者も少なくないため、それを補うことが第一の目的であるが、被災地の児童が地域について学び、復興に主体的に関わろうとする姿勢に、参加した学生にとっても有意義な体験となったことが実施後のアンケートからうかがえた。

そして、復興マップの構成についても昨年度から一部変更を加えた。特に大きな違いは、メインとなる

エリアの地図を2枚使用し、昨年度の復興段階や地域の良い所を示す情報と今年度の情報を地図上に色別の分類シールで示すことにより、地域の変化を視覚的に確認出来るようにした。図3に今年度の4年生が作成した復興マップの一例を示す。

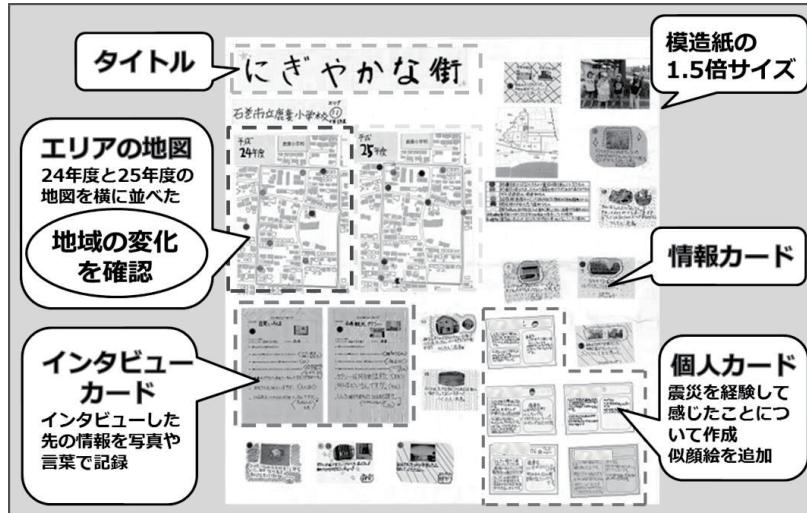


図3 平成25年度復興マップの一例

## 6. 今後の展望と課題

今後は、この取組みを来年度の4年生につなぐために、復興マップの3年生への発表会や、昨年度復興マップづくりに取り組んだ1つ上の学年(現5年生)への報告会のための準備・発表、成果物を児童が発信するためのツールとしての復興マップパンフレット等の作成とその発信を予定しており、マップの共有に向けた取り組みを強化していく方針である。

プログラム普及用の指導案は、今年度の経験から現場の先生方の教育支援ツールとして活用しやすくなるように、さらなる改善を加え、石巻市教育委員会やその他関心のある学校や地域の教育委員会に共有される予定である。また、記録や成果物の蓄積方法や蓄積された情報の活用方法については、紙情報をデータベース化してインターネット上の地図システムで管理することを検討している。これによりこの取り組みを通じて獲得される貴重な地域の記録や、その情報の活用が可能となるが、蓄積されたデータの管理・運営や、その活用方法については、さらなる検討が必要とされる。

## 謝辞

25年度の復興マップづくりプログラムの実践、学習指導案の開発にあたり、石巻市立鹿妻小学校大谷友宏校長、千葉宏樹教務主任、4年生担任萩原学教諭、本郷真哉教諭など関係のみなさまに深く感謝申し上げる。さらに、学校教員の立場から北浦早苗氏より、また、まち歩き用のマップ作成では、東北大学災害科学国際研究所情報管理・社会連携部門災害アーカイブ研究分野より、多大なるご協力を頂いた。深く謝意を表す。また、本研究は東北大学災害科学国際研究所特定プロジェクト研究「学校の災害危機管理の高度化に関する総合的な調査研究」の成果の一部である。ここに謝意を示す。

## 参考文献

- 1)佐藤健・村山良之ほか:自然と社会の地域学習に基づいた小学生のための災害安全教育モデルの開発と実践—仙台市長町地域を例に—.安全教育学研究:9(1), 31-48,2009.
- 2)佐藤健・村山良之ほか:小学生のための地域性を考慮した地震防災教育の実践、安全教育学研究:11(1),25-40,2011.
- 3)佐藤健・村山良之ほか:石巻市立鹿妻小学校における防災・復興教育の実践事例、東北地域災害科学研究集会講演予稿集:2013
- 4)佐藤健:東日本大震災被災地の小学校における災害復興教育プログラムの実践.日本建築学会技術報告:20(44),417-422,2014.(印刷中)